

特定非営利活動法人日本文化体験交流塾の理事 大久保美智子さんは、NPO 法人「五色桜の会」の代表としても、活躍しています。

水で割ったら桜色のお酒

五色桜 思いはせ一杯



今春の荒川堤の様子。桜並木が少しずつ再現されている＝足立区堀之内1丁目先、区提供

かつて、足立区の鹿浜橋から西新井橋までの荒川堤一帯に3千本以上も咲いていた桜は「五色桜」として親しまれ、多くの花見客でにぎわった。ところが、堤防工事や、戦中、戦後に薪に使われるなどし、すべて伐採された。今では桜があったことを知る人も少ない。そんな桜の話を伝えたいと、地元のホテルが24日、お酒を水で割ると桜色に染まるリキュール「五色桜物語」を発売する。（伊藤あずさ）

桜があった地域の一部は江代、村長だった清水謙吾氏北村と呼ばれていた。「江北」が、大名屋敷などにあった名村の歴史を伝える会」などに、桜を植えたのが始まり。ソメよると、荒川堤の桜は明治時、イヨシノだけでなく、黄、

足立の酒販店 NPOと企画 リキュール発売、荒川堤再現に期待



「水で割っても水で割っても楽しめる」と話す成田一司さん＝足立区中居町

お酒を思いついたのはNPO法人「五色桜の会」の代表、大久保美智子さん(57)。区の郷土博物館で働いている時、五色桜の歴史を知り、「伝えていかなくては」と思った。退職後、会を設立し、2007年にワシントンを訪れた。ポトマック公園だけでなく、町中にも江北から植樹された桜の孫桜などが多く植えられ、「大事にされている」と感じたという。

今年7月、千住地域にまつ

色、白、紅色などさまざまな色の花があることから、「五色桜」と名づけられたとされる。川沿いに約6㎡、3200本の桜並木が続いた。

1912(明治45)年には、尾崎行雄・東京市長から、「日米友好のシンボル」として苗木が贈られ、アメリカのワシントンのポトマック河畔に植樹された。

ところが、河川のはんらんや改修、工場の煙害、さらに第2次世界大戦の影響で、薪用に伐採されるなどして姿を消してしまった。

荒川堤にはアメリカからの里帰り桜が少しずつ植えられている。区は20年までに明治期にあった100種近くの品種のうち、現存する49品種で荒川左岸に4・4㎡の桜堤を再現しようとしている。里帰り桜を接ぎ木し、2〜3年で2㎡ほどに育った苗木を植えていく。11年2月ごろには178本が植えられるという。

大久保さんは「お酒を通して、自分たちの街が桜の街だったことに気づいてほしい。桜が咲いたら、お酒の上に花びらを浮かべて飲むの。きつとすてきよ」とうれしそうに話した。

色、白、紅色などさまざまな色の花があることから、「五色桜」と名づけられたとされる。川沿いに約6㎡、3200本の桜並木が続いた。

1912(明治45)年には、尾崎行雄・東京市長から、「日米友好のシンボル」として苗木が贈られ、アメリカのワシントンのポトマック河畔に植樹された。

ところが、河川のはんらんや改修、工場の煙害、さらに第2次世界大戦の影響で、薪用に伐採されるなどして姿を消してしまった。

荒川堤にはアメリカからの里帰り桜が少しずつ植えられている。区は20年までに明治期にあった100種近くの品種のうち、現存する49品種で荒川左岸に4・4㎡の桜堤を再現しようとしている。里帰り桜を接ぎ木し、2〜3年で2㎡ほどに育った苗木を植えていく。11年2月ごろには178本が植えられるという。

大久保さんは「お酒を通して、自分たちの街が桜の街だったことに気づいてほしい。桜が咲いたら、お酒の上に花びらを浮かべて飲むの。きつとすてきよ」とうれしそうに話した。